

広報えびな

編集・発行
海老名市役所広報広聴課
〒243-04
神奈川県海老名市勝瀬175
☎ (0462) 31・2111

2千人に聞きました



ふるさとに望むことは? 「市民意識調査」結果まとまる

去年11月に実施した「市民意識調査」の集計結果が、このほどまとまりました。この調査は、日ごろ市民のみなさんが市政に対しどのようなことを考えているかを把握して、今後のまちづくりに反映させるために行ったもので、無作為に抽出した2000人の人たちに「海老名の生活環境はどうか」「今後、市に力を入れて取り組んでほしい施策はなにか」など、アンケート形式でお尋ねしました。今回は、この調査結果の概要をお知らせします。なお、詳しい内容は市図書館か市役所の情報コーナーで17日から閲覧できます。



8割の人が「海老名市は住み良い」と回答

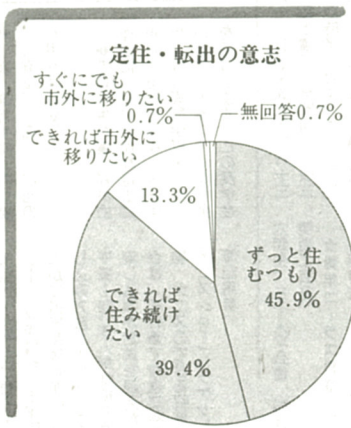
「ずっと住むつもり」(46%)
「できれば住み続けたい」(39%)

85%が「住みたい」
定住・転出意志

10〜19年が33%
居住年数

調査対象の三人に一人が「十九年」(33%)で、以下「二十一年」(29%)、「五年未満」(20%)、「五十九年」(19%)、「三十年以上」(11%)の順になっています。地域別にみると、「三十年以上」と答えた人が最も多かったのが社家・門沢橋地域。逆に「五年未満」が最も多かったのが、近年その一部で大規模な宅地開発が行われた杉久保・本郷地域でした。

定住性が高い生活環境



「まあ住みよい」と答えているという定住意志を示す人は八五%でした。これを年齢別にみると、年齢が高くなるほど「住みたい」と答える人が増えています。

自然などを評価
環境・施策の状況



自然環境が高い評価

反対に「できれば市外に移りたい」(13%)、「すぐにでも市外に移りたい」(1%)という転出意志を示す人は一四%でした。転出を望む理由としては「通勤・通学が不便だから」が最も多く二二%、以下「周りの環境が悪い」(20%)、「生活が不便」(17%)、「自分の家を持つため」(11%)と続きます。転出希望理由を男女別にみると、「通勤・通学が不便」「自分の家を持つ」が男性に多く、「生活が不便」「環境が悪い」が女性に多くなっています。なお「海老名市は住みやすいか」という設問には、八三%の人が「住みよい」

関連記事は
4・5面に掲載

フォトピックス

会場は「春の香り」

市庁舎で「花き品評会」



二月十七日、二十八日の両日、市庁舎で「花き品評会」

日、市庁舎で「花き品評会」が行われた。会場は、ひと足早い春の色と香りに包まれ、訪れた人の目を楽ませていた。



講師から説明を受ける受講生

講習を終わった受講生から「その手紙や文書」へ活用してみます」といふ声も。中心学園にイチゴ贈る

二月二十一日、海老名市園芸協会イチゴ部会(発着義光部会長、会員39人)が、児童養護施設「中心学園」(加藤田稔園長、児童71人)を訪れ、新鮮な女峰イチゴ二十ケース(30kg)をプレゼントした。

余暇活動に利用

高齢者のワープロ講習

日ごろ、ワープロを習いたいと思ってもチャンスがないとか、自分はOAは苦手だといふそんな高齢者の方のために、



当日、午後三時に同学園を訪れた落合三男からイチゴを手渡された園児たちは、さっそく試食を楽しんでいた。「海老名のイチゴは甘い」と歓声を上げていた。

体力増進にひと役

婦人水泳教室に30人

婦人を対象にしたスポーツ教室(水泳)が、運動公園屋内プールで始まり、初日の三月五日は、三十人が参加した。



水泳の基本を練習する受講生

ある参加者は「水泳を習うのは初めてだが、こんなに泳げるようになるとは思っていませんでした」と話していた。なお、同教室は三月十九日までの五日間、同プール

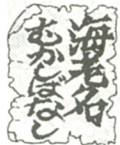
に応じて三グループに分かれ、呼吸の仕方や手足の動かし方など、

どの基本を同協会員から指導を受けていた。

海老名むかしむかし

☎33・3838

電話で海老名の昔ばなしが聞けます。3月3日~3月16日 第10話 泣き別れ坂 3月17日~4月1日 第11話 風憑き



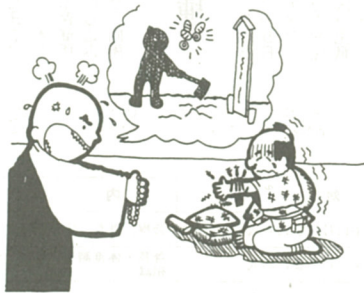
第276話

仙吉のはなし(上) 墓を暴いた 博徒の仙吉

天保のころ、政治返の杉久保境にマスという独り暮らしのお婆さんがいたが、俗にいう「年寄りの死に欲」なのだろ、日雇い暮らしをしながら働いては貯め働いては貯め、ひたすら金を貯めることに執念を燃やし、それだけが生きがいのような生活だった。

主の家へ住み込み奉公させたが、いったん身についた悪の鉄は抜けず、主家の金を盗んで姿をくらましてしまった。十年ほどたつてタツという若い女房を連れてふよっころ帰ってきたが、父親は半生ほど前に亡くなっていた。この女房は伊豆大城の鷹、河津の広いワサレ田を持つ富豪の娘だといふところから、かどわかしで連れてきたものだろう。育ちの良さを思わせる上品な言動は仙吉とは雲泥の差があったが、別れようとする様子もなく、身を恥してか過去について一切断らなかった。

ある晩、突然帰宅した仙吉は、鉄と錠を持って出かけ、だいが夜が更けてから泥まみれになって戻ってきたが、顔は青ざめ、手ぬぐいでくるくる巻いた左手はふよっころに入っていたが、一晩中うなされ続け、寝巻きは何度取り替えても汗びたしになってしまった。仙吉は夜の明けを待って、また旅に出ると言ってお家を出たが、すぐその足で近くの菩提寺へ立ち寄った。住職は、「また何か仕出かしたのか」とにらみつけた。



「自分はたえ八大地獄をのたつて苦しんでも自業自得だが、女房子供には地獄の苦しみをさせたくありません」と、ざんげの涙に濡れて哀願した。住職は、「お前のような悪党にも妻子を思う心が残っていたのか。それだけが地獄界から天上界へ通する救いの糸である。その一本にすがれば諸天菩薩が必ず救うてくれる」と、仙吉に身延山久遠寺にあてた手紙を持たせて旅立たせた。(小島真司)